

---

# 白の夜叉と銀の・・・

カヲル君を愛して

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の夜叉と銀の・・・

### 【Zコード】

Z0015W

### 【作者名】

カヲル君を愛してゐる

### 【あらすじ】

突然の電話に出た銀時そしてそれを境に姿を消した銀時

その何日か後に辻斬りが・・・

注意オリキャラが出るかもです

## 第零章 まだ始まつたばつかなのこ話しひのが多いし万事屋しかでないしーー

銀魂の小説書きますよお  
気合いれるぞ

オリキャラいつか出します  
サブタイは土方とズラの叫びです  
「ズラじゃない桂だ」 w w

## 第零章 まだ始まつたばつかなのJ話してるのが多いし万事屋しかでないし――

「銀や――ん、朝ですよ~~~~~」

「あと4時間・・・・・」

「どんだけ寝る気だよ」

「いいだろう別にイ」

「良くないね、飯が食えないのアル」

「いいんですかあパフェ奢るひつと思つたのになあ

「ハイっ起きます――

新ハパフェ奢れよ――！」

「ええつやつぱり起きた理由それかよ」

「いいから早く飯食うのネ」

ジリリリリン

「あつ電話アル」

「俺が取るわ」

「珍しいですね」

「明日雨が降る日」

「んなこたあねえよ」

ガチャリ

「はい万事屋です」

「銀時があ？」

「そうだけどお」

「『時』が来たぜえ」

「ああ分かつたじやまた後でなあ

「そうだなあ」

ガチャン

「依頼ですか?」

「いや俺のダチだつた

「ダチいたアルカ?」

「いるからねいますからね

5日ぐらい帰らねえから

「なんですか?」

「ダチに会うから

「そうアルカ

「わかりました」

「じゃあ行つてくるから」

「ハイ行つてらっしゃい

「いつてこいアル

「おう」

この時神楽とデメる・・、ゴフンッ新ハはあんな悲しい事が起きるとほ  
分からなかつた

## 第零章 まだ始まつたばつかなのに話しかねるが多いし万事屋しかでないし——

新「作者今ダメガネ言いかけたよねっ」  
作「つせ・・・わあ知りません～～」

こんな感じでやつてこきあすんで宜しく  
神楽の喋り方が難しい・・

## 第一章 いつまでも裏切られるのかがわからねえ（前書き）

よし書きますよお

神楽ちゃんのしゃべり方知らないし・・・  
てかあんまアニメみてねえよ

見ないとなＤＶＤかりよおかな?  
でもかねないし・・・ブツブツ

短いですよ

では本編ヘレッスGO～

投稿した矢先に・・・書き直し文才がほしいよ

# 第一章 いつまいで裏切られたのかがわからぬえ

「ふあああ よく寝た」

「よく寝んなあ」

「悪いか寝たら低杉

「誰が低杉だあ～～

「いいじゃねえかよ、そろそろあの人のとこ行くか

「そうだな

場所は変わつて万事屋

「銀さん今頃誰と会つてんのかな?」

「あああからないアルヨ、それよりダメガネ酢昆布買つてくる四口  
シ」

「自分で行けよ……！」

とこつものようにふざけていた……。

「先お前から喋るか?」

「いや俺はいいお前は何か喋んないのか銀時イ」

「ああやつをせてもらつわ」

と語っていた

「なんか嫌な事がありそうだな  
いつてみるかあの人のとこに」

「ど!」「いくんですか?..桂さん」

「先生と話してくるだけだ」

「わかりました、では氣をつけと」

「ああ」

と攘夷志士の桂が言った

第一章 いつか裏切られるのかがわからねえ（後書き）

半端ですみません  
適当でスママセん

井伊のしほがひん

オマケ

の？？

「」  
ノミコトニシテ

桂一とJINで宿題は終わるのか?」「作「えつ宿題いえぜんぜんてつけてません」

「8-1」  
「めがね」

高一 グラ別にいいだろ作者いいぜえ教えてやるよ

高木の不如言

近「いいなあ俺も大好きって言われたい」

「ゴリラはだまつとけえ」

面白かつたかな??

## 第一章 どうしてはなをねえのか意味わからねえ（前書き）

今日2度目の投稿なのに短いww  
温かい目で見てね^ ^

## 第一章 ハリケンはなぜか意味わからぬ

= = = = = ジロジロ先生の墓場 = =

「なあもう二二かあ？」

「ああここば」

「じゅあ行へかこの世界をぶつ壊しに

「やまだなあ～

でつそここ西のジラでハコによ

「氣づいていたかそれに私はジラじやない桂だ――――――

「クククッ どつけでもこいじやねえか

「でつ銀時は句故高杉と居る?..」

「――じゃんべつとい関係ないでしょ

「では何故こいつと一緒に世界を壊して行くのだ??」

「決まつてんだらおが、先生を奪つた幕府に仕返して行くためだろ  
が!!」

「ではリーダーと新八君はビリあるのか?」

「ええ別に斬るだけだよ 邪魔したらねーーー！」

「なつお前はあいつらを斬れるのか？」

「斬れるさだつて赤の他人+敵なんだからよお

「高杉お前銀時に何を吹き込んだ?」

「クククッ何にも吹き込んでなんぞあねえぞ  
これはこいつとの約束なんだよお

「銀時は何故黙っていた?」

「畜生理由ねえだろ

「じゅ行くか銀時イ

「やうだなじやあな桂

「桂ではないジラだつ

「クククッ間違えてやがるぜえ」

「おい作者何故こうシリアスな場面を壊す??」

すみませんジラさん

「ジラじやない桂だああ  
てかもうこないし

（3日後）

＝屯所にて＝

「なに白夜叉が誰だかわかつただと……！」

鬼の副長　土方が叫んだ

「わかつた今から近藤さんのところに行く山崎は総悟呼んで来い」

「わかりました」

第三章へ続く

## 第一章 ピーチはなぞねえのか意味わからねえ（後書き）

ああまた半端で終わらせてしまつた

読者の皆さん本当にすみませんm(――)m

それではBAYBAY

## 第三章 PCがシン自然而になりやがつた（前書き）

サブタイが思いつかないのと  
自分の気持ちをかいたらこうなった……

今日も短いです。

## 第三章 PCがシントレになりやがつた～

＝＝屯所＝＝

「近藤さんも総悟もそろつたか山崎話してくれ

「ハイ驚かないで聞いてください

実は万事屋の旦那が白夜叉だつたんですね！..」

「ええ～そんな分けないでしょ

よりにちよつて旦那がそんなことするはずないよお

「そうだと何かの間違いじやないの？」

「いや近藤さんは多分本当の事だらう」

「トシなんで本当の事だと思ひのだ？」

「いや簡単な話だ、白夜叉は銀の髪に紅い瞳白い羽織だつたよな  
その特徴がはまり過ぎじやねえか？」

それには自分過去の事を話さねえ

それに攘夷志士だつたらあの腕の強さも納得いくし  
紅桜の一件で桂と高杉に会つていた事も分かる」

「それはそうだな

「でも本人に聞かないとわからねえだろお

「その事についてですが旦那は3日前から帰つていません

「何？？それは本当か山崎！！」

「ハイそのようです  
旦那に会いに行つたのですがあと2日ぐらい帰つてこないそうです」

「そつかわかつたこれからは高杉の様子を探れ」

「ハイ分かりました」

「土方「ノノヤローは旦那が白夜叉だと分かつたら斬るの？」

「…………斬らないといけないな

「でもトシお前にかなう奴か？」

「近藤さんこの人は無理だよ一回負けてるもん

「そんな事関係ねえんだよ……………」

「まあこのことは万事屋が帰つてきてからなーー」

「「ああ／ハ－イそれじゃサボる」「

土方たちはまだ大変な事になると誰も思つていなかつたのだろう

## 第三章 パジがシンテレになりやがった（後書き）

真斯田ジナジ

高杉出したかづたへへ

# オマケ

沖一  
ねえ作者さんは誰か好きなの???

卷之三

「誰が多串君だ！！！」

ツツテジヤなし桂た!!!!!!

世間の事実を記す

沖「じゃあ付き合つて」

作  
-  
/ / / /  
し し よ お  
/ / / /  
[

卷之三

きりがないのでおしまい WWW

## 第四章 小説読んだら・・・・・壊れたあ～～～（前書き）

サブタイはさつき読んでた小説の感想テス  
壊れたものは判断力などです  
2次元行きてしま～～～

#### 第四章 小説読んだら・・・・・壊れたあ～～～

6日後＝＝「万事屋＝＝

「銀ちゃん帰つてこないアル」

「そ、うだねなんかあつたのかな？」

すると

ピンポン

「ダメガネ行つてくるアル」

「ダメガネじやないですよ！――」

「いいから行つてくれるアロシ」

「本当に人使いが荒いんだから」

「ハ～イなんか御用ですか？？」

「土方さんそれに皆をどうしたんですか？？」

「旦那は居ますか～イ

「今いないですけど・・・・」

「やつぱしか

「エリーハーに行つたか知つてゐるか？？」

「えつと友達に会いに行くから5日は帰らないって言われたんですね  
けど・・・6日たつた今も帰つてこなくつて」

「なんだ税金泥棒ぢやないアルカ

サドヒマヨラーーハーリラと帰るアル

「ハコハハハハハハ神楽ちゃん・・・」

「真新組・・・今は休戦しないか？？」

「その声は桂！――！」

「ジラ何しに来たアルカ？？」

「いや大変な事になつてゐるからなお前たちと真新組に知らせよつ  
と思つてな」

「まあハハジヤ何だしちベビハハ

「まあハハジヤ上がらせてもらひ

「单刀直入に言つ今だけでもいい手を組まないか？？」

「何でだ？お前たち白夜叉の正体わかつたんだろ」

「何故知つている？？」

「いや調べただけだ」

「まあいいそれで大変なことって何だ？」

「そうアルネ大変なことって何アルカ早く話すヨロシ」

「6日前ある人の墓場に行つたら高杉と銀時が一緒に居たそれを隠れて見ていたのだが聞いてしまったのだ・・・・・」

「何をだ？」

「世界をぶつ壊しに行くといつていた」

「何だと？？」

「何故それを早く言わないアルカ」

「そうですなんで僕たちに話してくれなかつたんですか」

「ここの6日間調べてきたんだが・・・・・  
どうやら春雨の奴等第七師団と手を組んだらしい」

「なつ神威のバカ兄貴が・・・・・」

「なつそれは本当なのか」

「本当だらだから」ついして貴様らに教えている

第四章 小説読んだら・・・・壊れたあ～～～（後書き）

半端だ～～～～～

誰か文才をくれ～～～～～～～

2次元に行かせてくれ

## 第五章 泣くことは恥ずかしいよね～（前書き）

やばい・・・沖田があハアハア これは銀魂の沖田ではないデス  
薄桜鬼～～映画化なつて～～死亡フラグは立てないで～～  
さつき小説読んで泣きましたなのでこんな事に・・・  
短いけどGO～

第五章 泣くことは恥ずかしいよね〜

II 万事屋 II

「どうやる近藤さん」

「いいだらつ手を組もう」

「近藤さんが言つならア従いますぜえ」

「そ、うだな」

「僕も戦います」

「私も戦うアル」

## 「新八君とリーダーはダメだ」

「何でアルカ／何でですか？」

「」

「言いにくい事なのかな？」

—ああまあそうだな

## いいから言うアル

「シリコンプロジェクト」

「でも傷つくな」

「いいつていつてるネ」

「そうです僕達は大丈夫ですから」

「強いな君達は」

「わかつた腹をくくり・・・・・「たとえ君達が銀時の事を『家族』と言つても邪魔つまり銀時や高杉、神威達の『敵』になつたら容赦なく斬る」と本人が言つていた

「なつ」

「旦那はそんな事言わないぜえ」

「そうアルでまかせアル」

「そつですよ何桂さん嘘を言つたですか?頭可笑しいですよ」

「万事屋がそんな事は言わないと俺も思つ」

「俺は・・・・近藤さんと同じだ」

「それが本当だとしたらお前らはびいすむ?」

「それは・・・・」

「そもそもそんな事言つはずないアル

だつて紅桜の時に「今度会つたらたたつ斬る」って言つてたアルヨ  
銀ちゃんがそんな事言つはずないアル」

「お前達が信じないのでつたらそれでもいい  
高杉に操られてるつて言つ可能性もある

この事はまた2日後に話さうその時まで俺達は調べる

「わかった」

「近藤さんがそれでいいなら従いますぜえ」

「俺もだ」

「私もネ」

「僕もです」

「じゅ2日後」  
「ひうまう」

「じゅ帰ろつか」

その日の夜から辻斬りが行われることになつて居る奴らはじるよ  
もなかつた・・・・・

## 第五章 泣くことは恥ずかしいよね～（後書き）

短いです

スミマセン

誰か文才をください・・・

## 第6章 あ～もうネタが浮かばね～～（前書き）

ネタが浮かばない～～（泣）  
短いし・・・・泣きたいよ～～

第6章 あ～もうネタが浮かばねえ～

夜の小道にて

「ギヤヤア～～やめてくれえええ～～～～～～～～～～～～」

グサツ

「お・・・・・・・鬼いいくんなあ  
近寄らないでくれえ『白夜叉』うわつああ」

そんな歟末魔と共に闇にて来るのは、『白夜叉』と言わたる。彼の声

「ええええ～引かないでくれるかな～～もつと『血』浴びさせよ・・・ククククツ」

「ヒイ・・・・・（しまつた・・・・）」

「あーーー声出しちゃつたねククツ

今殺してあげるからそこで待つてね

「嫌だああ～～」

そう言つて男は走り出した・・・が彼が追いつかない筈もなく・・・

グサツ

「あああ今度は声も上げずに死んじやつたつまんないの」

「おい銀時・・・」「おここの名で呼ぶなって言つたでしょ」そうだ  
つたな『白夜叉』

「もうやつ銀時の名前はもう捨てたのだから白夜叉でいいの」

「もうだつたな」

「ねえもう帰つていこつまんない・・・」

「そうだなアお前よく一人で56人も殺せたなア」

「それは・・・アイツらが弱すぎるとから

ねえ明日もやるの??メンドクサイから万歳にやらせれば?..

「ククククソうだなアそれでいいかア」

「それでさ明後日に『あそ』に行つて『予告』してこなべりや

なあ

「そうだなアお前が行くんだつたよな」

「そつそつ楽しみだなあ あこづらの顔見てみたい

次の日 場所は辻斬り現場

「おこ」つやひでえな

「やうだなあ（クフフフ）これでも食らいやがれ）」

ドヘン

「おこ総悟

「なんですか土方コノヤロー」

「てめえ～何しやがった！～！」

「えつと、に土方コノヤローの死体を増やさうとしただけですが  
？」

「てめえたたつ斬つてやる…………」

「おこ」らつら今何しに来てるんのか分かるか

「えつと土方コノヤローの死体増やすためです／仕事です」

「総悟テメハ～少しば自重しやがれ」

「チツ しかたないなあ

「でも」つやひどいなあもしかすると万事屋と高杉の奴等が関わってるのかもな」

「旦那が関わってるわけねえ少しさ頭冷やしやがれ土方コノヤロー」

「トシが言つてる」とも一理あるな  
彼は一応攘夷志士だつたしな しかも狙われて殺されてるのは天導  
衆の奴等ばかり

一般人もたまにはいるが見られたから斬ったカンジだしな

「そんなんあ近藤さんまで・・・・」

「この事はまた調べよう  
それでいいだらアトシ」

「近藤さんが言つなり・・・・」

この日も天導衆の奴等が斬られて死んだことは言つともないだろ  
う・・・・

## 第6章 あ～もつネタが浮かばねえ～（後書き）

スランプと言つたの・・・

この前から宿題つて言つてたけど全然やつてません

風邪も治つてしませんむしろ悪化してきてる・・・

あああと一日かあ憂鬱だあああ

誰かやってくれ～

## 第七章 うん・・・テストだった～（前書き）

テストが憂鬱です～

でもテストで余った時間をオリキヤラの設定とか考えてるので・・・  
まあガンバロー

短いよ

## 第七章 ううん・・・・テストだった〜

＝＝万事屋＝＝

「集まりましたか」

「新八は纏めなくていいアル」

「なんだよいいじゃないか僕だって活躍とかしたいの元々」

「ひみこアルとと進めるプロロシ」

「桂さん集まつた情報は？？」

「すまない・・・手をぬくしたが入つてこない・・・真選組もスマ  
ン」

「まあまあ今は大変なんだから仕方ないよ

ガラツガラツ

突然の音に驚く真新組と桂さん達

音のした方に顔を向けるとそこには・・・銀さんが居た・・・

「銀ちゃんどこ居たアルカ？」

「銀さん心配したんですよ

「そつとひで駆け寄ろうとした新八達を止めた桂・・・

「てめえ銀時じやねえな」

「いつにも増して殺氣が掛かつた声で言つ桂

「そんなあどう見ても銀さんじやないですか」

「クククツ・・・やっぱバレッちやうか（笑）」

「そつとひで不気味な雰囲気を出しながら笑う銀さん・・・

「そつだよ・・・よつズラツ 僕は銀じやない白だよ・・・

白夜叉乗った銀さん

「白といつたなお前は何モンダア」

「僕の名は白夜叉 知つてゐるよねククツ」

「白夜叉・・・白那の体で何やつてんですかアー」

「白那つて銀の事？ プックク隨分慕われてるね・・・銀の体でつて  
これ本当は僕の体ナンダケド自分の体で天導衆の奴ら殺しちゃダメ  
なの？」

「貴様がああいつら斬つてたのか」

「それにあいつの体じやないってどうこう事だ？」

「ヅラ知りなんだそつかあいいよ話してあげるよ」

「僕は最初は銀だった・・・でも白夜叉が生まれて銀に封じられた。  
・・松陽先生に会つ前にね・・」

## 第七章 うん・・・テストだった～（後書き）

ハイここまでです

随分と短いなあ自分でも思いますけど違う作品の連載しなきゃいけないんでww

もう一つ増やしますけど・・・ガッコーが始まつたんでそつてでネタ考えてからの投稿になります  
ぢやアディオス

## 第八章 いろいろめんどくさいこともわかる

「どうこいつことだ?」

「僕が最初は銀だった・・・でも親に捨てられたときに『憎しみ』と『怒り』が出来た。そして戦場に

行つたそしてそのぐらいの時期に『白夜叉』がうまれたそして僕の人格と銀の人格が入れ替わった。そ

して『僕たち』にまた大切な人が出来た・そう『松陽先生』だった・・・。僕は『血に狂う鬼』になつ

た。松陽先生が『アイツ』に殺されて・・・目の前で・・・護れなかつた。自分は護られていたのに。

それで僕が『白夜叉』になった。銀はいつも心で泣いていた。だけどそれを気付かれないままここにい

た。『時』をまつてその時は銀河ココにいた表面では笑つても心では大きな闇を抱えて『憎しみ』

『怒り』『悲しみ』これらが混ざつた。今はこうしているけど『時』がきたら僕は消える。それが銀が

んだ事。僕が消えたらこの体も銀のものになる。僕は、銀のためだつたらなんでもする。あと5日で僕

は居なくなる。そしたらあいつは本物の『鬼』になる。『血を求めて』ここにさよう。銀は優しいか

つたのか?でもそれなのに目の前で口口サレタ。だから僕と銀は『復習』する。このことは高杉も知つ

てる。10日後にはココは火の海になる。それまでに命が欲しいんだったら逃げればいい。僕はこれか

らも『狂う』それじゃね もしこの体返して欲しければ5日後にターミナルに来い

そうして去つていった

「そりだつたのか俺はとんだ『偽善者』だ・・・アイツがどんな思ひだつたのか知らずに・・・」

「そりだアルいつも近くに居たのに気付かなかつたアル銀ちゃん苦しかつただろうな」

「そりだね神楽ちゃん僕も気付かなかつた銀さんの持つてる『悲しみ』に『怒り』に『憎しみ』にでも

僕達と一緒に居てくれた。」

「旦那アそんな過去があつたんですかい俺もまだまだない

「万事屋つクソッいつもテメーは一人で抱え込みやがる。俺等『家族』（仲間）が居るのに」

「そりか万事家は親に捨てられた。大切だつた『家族』のかわりの

人まで『田の前で殺された』それは

随分な量だな。本当だつたら俺等が助けてやれたのに・・・」

それぞれの思いはどう進むのか。みんなはしらない

白夜叉が消えて『銀時』が『狂つ』までアト5日・・・

## 第八章 いろいろめでたびくことともわむれ（後書き）

なんかダークですね怖い～

でわアーディオス

## 第9章 白夜叉がまじパネエ（前書き）

強いって意味でこのサブタイイです^\_^  
久々の投稿だあ~

暴れるぜ（笑

## 第9章 白夜叉がまじパネエ

＝万事屋＝

「どうどうあるんですか？」

「どうあるって何がネ？」

「銀さん助けるんでしょ」

「旦那……………」

「万事屋…………俺は…………」

「5日後か…………」

「俺は行くぞ」

「桂さん……………そうですね僕も行きます」

「私も行くヨロシ銀ちゃんを『取り戻す』ネ」

「旦那を取り戻すか……………おいチャイナ女俺もいくぜえ」

「万事屋……………俺も行つてやるよ……………」

「トイシ……………よしつ俺も行く」

「銀さん……………」

新八が言葉にしたのは悲しみの言葉  
嘆きの言葉……………この言葉は闇に包まれ消えていく

「団長、今度はバカな行動取らないでトキこな」

「知ってるよ、それよりお侍さんの味方ついつかな？それとも・・・  
・・・・・？」

「だんちゅ  
う 僕等は『

白夜叉』達と手を組んだんじゃないですか・・・

忘れないで下さこよ

「

「あつそうだった  
じや余いに行くか

白夜叉が消えて『銀時』が『狂つ』までアト4日・・・

## 第9章 白夜叉がまじパネエ（後書き）

よつし書き終わった

改めて思つけどコレの前の話意味わからなかつた・・・??

なんか途中から銀さん出でないし

びひつよひへ。

## 第10話

なんで俺は狂つてしまつたのだろうか??

それは『絶望』

彼は『大切だった人』を『目の前』で『殺された』 そう『黒夜叉』  
に・・・・・

「嫌な夢見ちまつた」

これは坂田銀時が思つてゐたこと・・・・・

彼は眩いた

「もう少しで『貴方』の『仇』がとれるたとえ『先生』が望んでいなくとも・・・・・」

でももうひとつ想つことがある

「（でもお前らは斬るうつと思つても斬れないよ・・・・・こんな俺でも『家族』つて思つてくれた『仲間』だと言つてくれた『あいつら』のことを）だから・・・・・俺は『狂つ』事に『したんだ』・・・なのに白のやつ余計なことしゃがつて・・・・」

零れ落ちた心の声は本当の「こと

だからおれは狂つって決めた・・・・・・・・・・・・

それが『もう2度と あの幸せだったあの日々』【戻れない】と  
しても・・・・・

白夜叉が消えて『銀時』が『狂つ』までアト3日・・・

## 第10話（後書き）

このじめへりうーい  
ww

第1-1話（前書き）

短あざわらうぢやつーーー。

「神楽ちゃん起きて下せこ

「う~んまだ眠いアル」

「いいから起きろ~~

「駄眼鏡（しょんぱち）じゃねえよ新ハだ~~」

「銀ちゃん起しに行かないと・・・・・・

この言葉に落ち込む2人・・・

「落込むなら書つなよ駄眼鏡だから駄眼鏡と書いて新ハと言われる  
アルヨ」

「仕方ないじやにですか今まで銀さんが出るのが田常だったんですね  
から」

そういへば『非日常』彼等の書つ『日常』はじめて銀さんが居る事・  
・・

「銀さんを絶対連れ戻しそうねーー」

「銀ちゃんを連れ戻すアル！！駄眼鏡しょんぱいがは足手あしづまといになるなアルヨ」

「僕だつて剣を使えるんです銀さんを戻すために頑張つてるんですから・・・」

これは彼等神楽と新八の『非日常

白夜叉が消えて『銀時』が『狂つ』までアト2日・・・

第11話（後書き）

新八はバカだよね^\_^

駄眼鏡だからねえ〜〜WW

第1-2話（前書き）

桂さんですよ～～

銀時が真実を話して3日が経ち4日目に入った・・・・・

「おー銀時のこと調べてるか?」

「ハイじらべてるそーです」

俺は俺の相棒エリザベスに聞いた

「そーかでもなんで高杉にしか話をなかつたんだろうな??.」

「それは敵になることを知つてたかもしれない」

「エリザベスそんな事言わないでくれよ今は・・・・・銀時<sup>アイツ</sup>のこ  
と信じたいんだ」

「やうですよねあんな日々を送つてたんでもんね・・・・・」

かつては仲間だった・・・・・それは『松陽先生』がいたから出  
会い一緒に戦つた・・・

『松陽先生』の『仇』に・・・・・

「頑張るつな一緒にエリザベス

〔 もうですね桂さん〕

白夜叉が消えて『銀時』が『狂つ』までアト一回・・・

第1-2話（後書き）

ハイ

ラストは真選組です

がんばろー

## 番外編（前書き）

番外もたまにはいいかな～と思いついて書いていました

番外編

銀時

「おい・・・なんで俺が悪役なんだよ」

作者

「なんとなくです」

神楽

「銀ひやんは悪役が似合ひアル」

銀時

「神楽はもとなじこと並ひのかよ・・・」

新八

「確かに似合いますよね」

銀時

「おいダメガネ今何つったアアン」

神樂  
ダメガネ  
新八もたまにはいいこと言つアルネ

新八

「誰がダメガネだつああああああ……！」

作者  
「いやどうからどこ見てもメガネで地味でダメ人間でしかも童貞だからさ」

新八

「どうでもいいだろ／＼童貞とか！！」

神楽

「別にいいアルヨ」

新八

「殺りますか？？」

作者

「いいよやるおかーー！」

銀時

「ああ～もつあの二人はほつといてもつ少しで最終回になるから絶対見ろよ」

高杉&沖田

「「見ててくれた女にはサービスしてやるよーー。」」

土方

「高杉イイ神妙にお繩につけええ～～

作者

「土方アアアアア高杉様が捕まつたら話がすすまねえから一回死ん  
どけよなつ土方コノヤロー」

土方

「俺の扱いひどいだろ～～

みんなで！！

「次回も見てくれよな～～～～～～～」

桂 & 近藤 & 山崎

「俺らは～～～？？」

作者

「ザキイイかわいい～～～」

「山崎 あつがとう」

桂&コニカ

「うわああるこ～～～

」てか、今つたりて・・・・・(泣)

みんなで(本物)

「せこせこ～～～

真選組

「はあ～～」

「どうしたんですか？近藤さん」

「ああ～トシカ・・・いやな早く前みたいに戻んじゃないかなってよ」

「せつじょねえ」

「總じたのか」

「だって今日で5日目だから・・・」

「マジかよ」

「もしかして忘れてたんですかイ」

「あ・あ・あ・・・・

「まあいいっすよ今田せ

「お前はじめてや珍しいな

「はやく田那を迎えていいかないとなア」

「よしいくか

「「「「おひへせこ」」」

A vertical column of black dots arranged in a grid pattern, representing a binary sequence. The dots are evenly spaced and extend from the top to the bottom of the page.

「ひどいですか～～」

と二つの会話をしながらター＝ナルに向かつのだった・・・

銀時が  
——まあと少し

## 第1-3話（後書き）

すみませんええええん

総吾はキャラ崩壊してます

すみませんでしたああ～

第14話

ターミナル

「お前まで来たんだ高杉・・・」

「白が余計な事言つからなア」

「そりだよなあ・・・」

「つはああ

そこは銀時と高杉がいる場所にあつらひってきた

「あああ

「ジラあーお前体力なくなつてきんのかあー

「あつ高杉」

「ジラぢぢやない桂だ！……！」

「銀ちゃん戻るアル」

「神楽スマネエな俺は……『あの人』のために戦つんだ」

「ここ」の言葉はこれだった……だが聞こえたのはたぶん桂と高杉だけである。

・ 聞いていても『あの人』は誰のことだらうとしか思わないだらう・

「おい田那ア俺ら待つてますぞ」ハイ

「何をだ？？？」

「それは・・・」

「「「「「お前を／銀ちゃんを／万事屋を／銀さんを／取り戻す／アル」」」」」

その言葉を聴いたとき

銀時は・・・白は・・・嬉しかった・・・

「（なにで俺をここまで必勝へつてくれんだよ）」

「（銀は幸せ者だな 銀は氣分こころんどしう いの気配・・・・・）」

白は・・・最後のはひは懲りひだつた・・・

「いやなどいじでなこしてゐるんですか?」

その声が聞こえたとき・・・歯は固まつた・・・

それと同時に銀時は・・桂は・・高杉は・・

「・・・ひ・・・何で・・・口口にいるんだよつ・いるんですか??.」

不思議だつた・・・

「本当に貴方達なんですか？」

神楽たちはわからなかつた・・・いや知らなかつたこの人が誰なのかを・・・

いや知る由もなかつた

だつて目の前にいるのは・・・

銀時たちが・・・何のために戦っていたか・・・その理由の  
人だったから・・・

「銀時久しぶりですねっ！」

「…………つ本当に先生なのか？」

小太郎も

晋助も・・・・・・・・

そのときに神楽たちが見たのは・・・

『3人の』 . . . . .

いや

『4人の』 泣き顔だつた

「会いたかつた・・・」

「銀時は相変わらず子供っぽいですね（苦笑）」

バーン

突然響く銃声・・・・・

そこにいたのは・・・

## 第1~4話（後書き）

次回最終回・・・

の予定です！！

**最終回（前書き）**

死ネタです

「あつ・・・・・・・・・・」

突然倒れる銀時・・・・・

撃たれた方に立っていたのは・・・・・・・

神威と

黒夜叉だつた  
・  
・  
・  
・  
・

「フフフウツ」

笑っていた

黒夜叉だけが

不気味に笑みを浮かべていた・・・

「銀チヤアアアアアン」

「銀・・・セ・・ん?」

一人は駆け寄つた

と同時に

「馬鹿兄貴銀ちゃんに何しタアアアアア」

神楽はもう「ワフレティタ

銀ちゃんが撃たれた時に

もつすでに

銀ちゃんの意識は朦朧としていた・・・

「つクソ……かぐ……らつ……幸せに……つ……な……れ……よ……新ハもつな……土方……と……」といつら……うい……たの……だ……ぜ」

# バタツ

と

音がした

と同時に・・・・

死んでいった

「あああお侍さん死んじやつた」

「神威」

「じゃバイバイ」

神威は黒夜叉とともに姿を消した

そして・・・・

先生も一緒に・・・・・

銀ちゃんが死んで残つたのは・・・・

かつて一緒に戦つた『仲間』と

一緒に楽しい日々を過いした『家族』『仲間』の

悲しい顔と涙・・・そして叫び声だけだった・・・

【完】

## 最終回（後書き）

なんか最後は死ネタになってしましました・・・

感想を俺にくれつ！！

では次の連載でお会いしましょうっ！！

see you next time!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0015w/>

---

白の夜叉と銀の・・・

2011年10月9日15時24分発行